

63回目の夏

上岡を襲った悲劇

あなたは

知っていましたか？

63年前

このまちにも

爆弾が落とされ

命を奪われた

人たちがいたことを…

終戦間近の戦況

昭和16年12月に勃発した太平洋戦争。米軍は昭和19年11月、マリアナ諸島に長距離爆撃機B-29の基地を建設し、日本本土への攻撃を開始しました。軍事基地や工業地帯、主要都市に焼夷弾などの雨を降らせました。日本の工業生産や交通はまひ状態となり、一般市民を巻き添えとした無差別攻撃は、おびただしい数の家屋を焼き、命を奪いました。

高知県内でも、昭和20年1月19日から終戦までに49件、323回の攻撃を受け、500人近くの尊い命が失われました。

そして野市町上岡地区にも爆弾が投下され、10人が犠牲になりました。

焼夷弾：焼夷とは、焼き払うこと。焼夷剤を入れた爆弾で、主に建造物などを焼くことを目的とした。燃焼すると3千もの高熱を発するため、落とされた区域は焼け野原となった。

頻繁だった

爆音とサイレン

上岡地区の西側、物部川の対岸には高知海軍航空隊の日章飛行場（現高知龍馬空港）がありました。この航空隊は、実戦に参加しない偵察要員育成のために開設されたものでした。

日ごろ、地区の人たちは飛行場から飛び立つ練習機の爆音や、飛行場を攻撃する敵機の来襲に慣れていたため、空襲警報のサイレンが鳴っても慌てる様子はなかったようです。



昭和二十年五月三日

上岡地区の住宅地に、爆弾が落とされたのは、終戦を迎えるわずか3カ月前の昭和20年5月3日午後3時ごろのことでした。

北の空からB-29一機が来襲し、上岡の上空で爆弾を投下。地区の人たちはB-29の爆音を、いつもの練習機だと思っていたようです。

空襲警報が鳴り、ラジオから、B-29が高知上空を旋回中」と流れた次の瞬間、ドンドンとすさまじい爆発音。続いてグワッと大きな地響きが起きました。

この突然の爆撃により、即死した町民7人、軍人2人、重軽傷町民4人のうち1人が死亡、その他作業中の馬2頭、牛1頭が即死でした。

上岡地区を襲った悲劇は、頻繁に飛び交う練習機の爆音や度重なる空襲警報によ

時限爆弾の恐怖

落とされた約20個の爆弾には、時限爆弾が混ざっており当日4発、翌日3発爆発しました。いつ爆発するか分からない時限爆弾の怖ろしさを知らない子どもたちが、怖いもの見たさに近づき、大けがをするという事故も起こりました。

上岡地区では、未発弾の調査に手間取り、避難解除になったのは6日の朝でした。

日章飛行場から

迎撃はなかった

上岡の悲劇から少しさかのぼった昭和20年初めごろ、戦局は悪化し、日章飛行場の練習部隊は実戦部隊として前線に動員されることになりました。3月には、神風特別攻撃隊菊水部隊白菊隊として編成され、米軍の艦隊を沖縄で攻撃するため、次々と日章飛行場から飛び立っていきました。

そのため上岡の空襲時には、

空襲の悲劇を

後世へ伝えたい

練習機を若干保有するだけで、敵機を迎え撃つ力はありませんでした。

徳島方面を襲った帰りだったともいわれるB-29は、置き土産のように上岡地区へ爆弾を落としました。今なお真相は不明ですが、関係者の間では、当時の上岡にあった3階建ての民家が、米軍に管制塔と間違われ狙われたのではないかと、あるいは物部川橋や上岡山を狙ったのではないかと考えられています。

戦後50年を経た平成7年8月、上岡地区の住民は、恒久の平和を祈念し、この事実を後世に伝えようと「被爆の碑」を、建立しました。

B-29爆撃機

航続距離4,585キロ・爆弾搭載量9トン・乗員10人という超大型機で、高度1万メートルを飛行できたため、この高度を飛べないゼロ戦をはじめとする日本軍の戦闘機はまったく歯がたちませんでした。終戦に近づくとB-29とそれを護衛する戦闘機集団、約500機で来襲するようになりました。このB-29爆撃機による無差別攻撃は、昭和19年11月24日の東京空襲を皮切りに、広島・長崎への原爆投下にも使用され、日本に死者約33万人、負傷者47万人、被災者528万人という信じられない悲劇をもたらしました。



野市町上岡

被爆の碑

平和への願いと犠牲者への供養の思いを形にし、爆弾が落とされた中心地に建立された祈念碑。裏面に「再びこのようなことのないように恒久の平和を祈念して被爆の碑を建立する」と記されています。